

協同労働から学生たちが得たもの

協同労働とは、出資・経営・労働を働く人が担う主体的な働き方である。新しい働き方として注目を集めているが、学生たちの目にはどのように映っているのか。今回は、協同労働を学んだ大学生たちがどのように働くことを考えたのかをテーマに、3つの報告を紹介したい。

まず、明治大学政治経済学部・協同組合学ゼミナールの12名が行った、労働者協同組合の組合員へのヒアリング調査の報告である。調査対象であるワーカーズコープ・センター事業団「みなと子育て応援プラザPokke」は、区民のニーズによって誕生した23区初の4つの事業を複合的に行う子育て施設である。学生たちはアルバイトなどの経験から働くことに負のイメージを持っており、主人公として自分らしく主体的に働くとはどのような働き方かという疑問をもち調査を開始した。組合員へのヒアリングを通じて、学生たちが感じ取った協同労働による「主体的な働き」への考察が示されている。

次に、福井大学看護学科で行った「ふくい看護論」についての、同大学の北出順子先生の報告である。看護学生は、普段は「患者さん」となった人たちから学ぶことが多いが、ふくい看護論は、健康な人たちから学ぶことを目的としている科目である。ワーカーズコープ・センター事業団「福井事業所」所長の森本喜美子さんがゲストスピーカーとして呼ばれ、協同労働やその働き方、地域の課題から居場所づくりに発展した例などの話をした。これに対する学生たちの感想は、北出先生が想像していた以上のものであり、看護学生の将来の進路と協同労働との折衷点があることへの気づきが報告されている。

最後に、ワーカーズコープ・センター事業団埼玉事業本部の小林豊さん、宇本永宏さんによる、埼玉大学での寄附講座の報告である。ここでは、講義で紹介された労働者協同組合「こども編集部」の概要と活動紹介に対する、学生の感想や質疑応答の内容が紹介されている。それをもとに、学生が働くことをどのように捉えたのかが考察されている。

学生たちの報告から、次世代を担う若者たちにとって協同ではたらくことはどのような価値をもっているのかを今一度考えたい。